

－洋裁教材のデザインの特色－

兵庫教育大 ○田中陽子 岩崎雅美

目的 第Ⅰ報では、裁縫科に新たに加わった洋裁教材の概要と、それが導入されるに至った背景について報告した。本報では、洋裁教材のデザインについて考察し、洋服の特性が学校教育においてどのように理解されていたのかを明らかにしたい。

方法 明治中期から大正末期までに使用された裁縫教科書を中心にして、当時の雑誌や写真等を資料とした。裁縫教科書にあらわれた服種は、シャツ・ツボン下・改良前掛・涎掛・帽子・下着類・子供服（表着）の7点で、おもに形・材料・裁断・縫製・着方など広い意味のデザインに着目して考察した。

結果 洋裁教材が小学校の裁縫科に初めて加わるのは、明治30年代である。初期の教材には、形や被服構成において従来の日本服飾の影響が見られ、型紙は和裁を応用した直線裁ちで構成されている。そして、ギャザーやタック等の洋裁技術を用いて立体的な形が生まれている。また、縫製が簡単で材料の使い方が経済的なことも特徴である。特に初期においては洋服は和服の付属品として用いられることが多かったため、デザインに和服との調和が配慮されていた。当時の裁縫科は、縫うことを非常に重視していたため、教科書には、製作に必要なことのみが手順通りに逐一記されている。それが大正末期になると、着用者の個性や趣味を主体にする洋服本来の特性や着方に関することが記述されるようになる。